

1 研究テーマ

かかわり合い、つながり合う学級づくり～構成的グループ・エンカウンターを活用して～

2 はじめに

所属校の実態として、児童に生活の中で自分の思いを十分伝え合ったり友だちとかかわったりする体験が少なく、つながりが薄くなってきていると感じている。児童がかかわり合い、互いに認め合い、友だちとの円滑な関係を築くために、教師がかかわり合いを意図的・計画的に仕組むことが必要だと考えた。

3 研究目的

かかわり合い、互いに認め合い、つながり合う学級づくりのために「構成的グループ・エンカウンター」の効果的な活用方法を明らかにする。

4 研究内容

(1) 学級の実態把握

学級や児童の実態を把握し、課題を明らかにするためアンケートを実施した。対象学級の児童は学校やクラスを肯定的にとらえている反面、自己肯定感が希薄であることがわかった。

(2) 研究実践

①学級活動における構成的グループ・エンカウンターの活用

○意図的・計画的な実施をする

学級の実態から、自己肯定感を高めるねらいをもったエクササイズを選択し、1年間の見通しをもって計画した。安心して参加できるように取り組みやすいゲーム性の高いものから、徐々に自己開示の必要なものへと配列し、意図を伝え継続的に実施した。

○エクササイズの工夫をする

エクササイズ「4つの中から」に、2週間前に行われた運動会という児童の身近な話題をとりあげるなど、自分の考えが持ちやすく安心して自己開示ができるよう工夫した。また、じゃんけんなどゲーム的要素があり、身体を動かす内容を実施することで、たくさんの友だちとかかわりが持て、本音を言いやすい雰囲気づくりに役立てた。

○シェアリングの充実をする

より多くの児童の意見が交流できるように、次の2点で実践した。

・教師の言葉かけの工夫

なかなか発言できない児童に対し、他の児童の発言を取り上げて、「同じ考えだった人いますか？」と手を挙げさせるだけでも意思表示になる。発言をした児童にとっても自分と同じ考えの人がこんなにもいるのだと分かる。また、じょうずにまとめたグループに対し、「どうしてじょうずにできたの？」とコツを紹介させることで、むずかしかったグループへのヒントにさせる。このように児童の言葉をひろって、つなげて、もどすことで、より多くの児童が意見を交流でき、自分の感じたことが受け入れられたり、友だちの気持ちを聞いて新たな気づきが生まれたり、自己・他者の存在を感じたりすることができた。

・シェアリングの形態の工夫

1学期の実践では、個人で振り返りシートを書いた後すぐに全体でのシェアリングを行ったが、2学期以降全体でのシェアリングの前に小グループでのシェアリングを設定した。小グループでのシェアリングを取り入れたことにより、振り返りシートの感想が「〇〇さんがこうしたらと意見をまとめてくれた。」「〇〇さんのヒントのおかげで完成できたと思う。」「あきらめようと思ったけど、みんなががんばっていたので、勇気がでた。」など発言の質に変化があった。自分たちのがんばりを確認しやすく、個人の振り返りシートの内容に他者を認める言葉が増え、一緒に活動した友だちの言動からも学ぶことが多くなった。

○振り返りシートの活用をする

振り返りシートにコメントを入れることで、一人一人にプラスメッセージを送るとともに、児童同士をつなぐ機会とした。「あまり思わない」に〇をしている児童には、私が感じたよさをひと言メッセージとして添えた。また、同じグループの友だちが感想に書いていたことを伝えることにより、友だちも自分のことを見ていてくれるのだというメッセージを送った。

## ②日常生活におけるエクササイズの活用

かわりを学級活動の時間だけにとどめず、生活に生かす活動を取り入れた。

○朝の会で「トーキングタイム」を設け、グループで今日のお題について話し合う。

○帰りの会で「きらきらコーナー」を設け、今日1日の友だちのがんばりを認め合う。

○2週間に一度の班替えで「スマイルレター」（資料1）を送り合い、お互いの良さを認め合う。

資料1



資料2

## (3) 結果と考察

### ①自己肯定度調査から

児童の自己肯定度の変化を見るために、自己肯定度調査を5月、12月に実施し、比較検討した。（資料2）

3項目とも「思わない」と回答している児童が減っている。意図的・計画的に構成的グループ・エンカウンターを行ったことで、自己肯定感が高まったと考えた。

### ②児童の感想から

構成的グループ・エンカウンターの際に毎回書いている振り返りシートの感想に着目した。「6回目からだんだん自分や友だちのことがわかるようになってきた。」「9回続けて私も少しはいいところがあるのかなと思えた。」と感想にあるように、繰り返し行うことでかわることの楽しさを感じたり、自分のよさに気が付いたりすることができた。

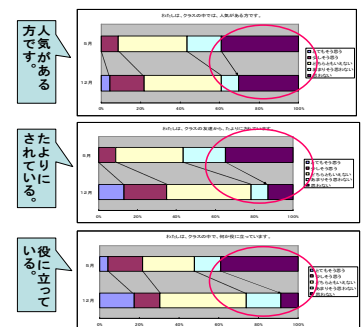
### ③シェアリングでの対話の変容から

生活指導上気になっていたKさんの変容を対話や振り返りシートから追ってみた。あるシェアリング場面においてKさんが「意見がばらばらのとき、〇〇さんや〇〇さんがしきってくれた。」と発言をし、友だちからも「Kさんは、進行役がっている。」と発言が返ってきたということがあった。シェアリングの充実が、自己肯定感の高まりや、互いに認め合えるような言動を生んでいるといえる。

### ④スマイルレターから

スマイルレターの効果について、担任の先生の「2週間に一度友だちのことを見つめる時間を設定したことで、友だちのよさを再確認し、回を重ねるごとに友だちのよさを深く見つめた文章が書けるようになった。」という感想に注目した。定期的に友だちからメッセージを受け取ることで、友だちとのつながりを実感し、自他を肯定的に見ようとする目が育ってきたことが伺える。

## 結果と考察(自己肯定度調査から)



## 5 研究のまとめ

これまでの取り組みで見えてきた構成的グループ・エンカウンター活用のポイントを挙げると、次の4つになる。

### ①つけたい力を明確にする

実態に合わせてねらいを設定し、意図的に活動を仕組んで行うことで、自己肯定感を高めることができる。

### ②計画性を大切にする

エクササイズを繰り返し行うことで、友だちを知るきっかけになり、人とかわることの楽しさや豊かさに気づくことができる。

### ③シェアリングの充実を図る

シェアリングを効果的に活用することにより、児童同士のかかわりが深まり、一緒に活動した友だちの言動から学んだり、自信をつけたりできる。

### ④日常生活とつなげる

日常生活において短時間でも構成的グループ・エンカウンターを継続することで、自他を肯定的に見ようとする目が育つ。

## 6 今後の課題

### ①児童の意識の見取り方

### ②構成的グループ・エンカウンター活用のためのリーフレット作成

## 7 おわりに

「学級の実態が〇〇だから、こんな力をつけたいから、このエクササイズを選び、子どもに投げかけたい。」というように、教師が明確な意図をもつことが大切である。今後も実践を積み重ねていきたい。